

著書紹介 松森晶子, 新田哲夫, 木部暢子, 中井幸比古 編著 『日本語アクセント入門』

著者	木部 暢子
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	3
号	3
ページ	193-194
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.15084/00000722

松森晶子, 新田哲夫, 木部暢子, 中井幸比古 編著

『日本語アクセント入門』

2012年9月 三省堂

A5判 223ページ 1,900円+税



木部 暢子

『日本語アクセント入門』というと、標準語のアクセントを学習するための本だと思われる方がいらっしゃるかもしれませんが。しかし、本書はそのような本ではなく、日本語のアクセントのしくみや成り立ちについて解説した本です。

ひとくちに「日本語」といっても、その中にはいろいろな方言が存在します。そして、方言も標準語と同じように、それぞれ整合性のある「しくみ」を持っています。本書は、そのような各地の方言を積極的に取り上げ、東京方言（標準語のもとになっている方言）や他の方言と比較しながらアクセントのしくみについて考え、最後に日本語アクセントの歴史に言及するという内容になっています。

本書は、次にあげる13章で構成されています。各章で取り上げた方言をカッコの中にあげておきます。

- 第1章 アクセントとは何か（東京，高知，鹿児島）
- 第2章 アクセントのしくみ（東京，青森県弘前）
- 第3章 アクセントの規則（東京）
- 第4章 助詞のアクセントと句音調（東京，青森県弘前，鳥取県湯梨浜町）
- 第5章 2型アクセント－鹿児島方言（鹿児島，長崎，屋久島，種子島）
- 第6章 3型アクセント－隠岐島の方言（島根県隠岐島，沖縄県多良間島，鹿児島県沖永良部島，鹿児島県徳之島）
- 第7章 アクセントの単位（東京，京都，鹿児島，長崎）
- 第8章 声調のある方言（京都，高知，香川県伊吹島）
- 第9章 外来語のアクセントと生産性（東京，京都）
- 第10章 複合語のアクセント（1）（東京）
- 第11章 複合語のアクセント（2）（東京，京都，岩手県雫石）
- 第12章 アクセントの歴史を知る（東京，京都，広島，高知，大分，鹿児島，香川県伊吹島，岐阜県垂井，讃岐，瀬戸内海の島々）
- 第13章 アクセントと音韻（東京，富山，島根県松江，金沢）

上の諸方言のうち、東京方言、青森県弘前方言、岩手県雫石方言などは、ピッチの「下がり目」や「上がり目」によってアクセント型が区別される方言、京都方言や高知方言、香川県伊吹島方言などは、ピッチの「下がり目」に加え、文節全体にわたる「式」（「声調」と呼ぶこともあります）によってアクセント型が区別される方言、鹿児島方言や長崎方言、鳥根県隠岐島方言などは、語句の長さにかかわらず、アクセント型の種類がN個と決まっている方言です（Nは1以上の整数を表します。Nの値は方言によって異なります）。アクセント体系を異にするこれらの方言を見ることによって、アクセントが整合性のあるしくみを持っていること、諸方言のアクセントがお互いに対応関係を持ちながら存在していること、そこから諸方言の系統関係やそれぞれの方言がたどってきた歴史が推理できることなどを知ってもらおうというのが本書のねらいです。

そのために、本書ではさまざまな工夫をこらしています。例えば、本書は各章とも《基本編》と《発展編》の2部構成になっています。《基本編》では、アクセントのしくみを学ぶ上で必須の事柄について解説し、《発展編》ではもう少し掘り下げた内容や応用的な内容について解説しています。《基本編》だけ読んでも日本語のアクセントの全体像がつかめるようになっていますが、《発展編》まで読み進めれば、さらに理解が深まることと思います。

また、各章にはColumnと「練習問題」を設けています。Columnの内容は、具体的な用例の追加だったり、現象の背後に隠れている問題点の指摘だったり、また、関連する話題の提供だったり、さまざまです。「練習問題」では、その章で取り上げた事柄がきちんと理解できたかどうかを問う問題を用意しています。問題を解くためのヒントや参照ページを示していますので、馴染みのない方言でもきちんと解答が出せるようになっています。これらを通して、日本語アクセントについて何らかの「発見」を経験していただければ幸いです。

なお、日本語にはこの他に、無アクセント（無型アクセント、一型アクセントと呼ぶこともあります）の方言があります。単語に一定の決まった型がなく、「雨」と「鉛」などの語のアクセントを区別しないような方言のことで、宮城県や福島県、熊本県、宮崎県などに分布しています。本書では、このような方言については取り上げていません。それは、本書の目的がアクセント型を観察することによって、アクセントのしくみや歴史を考えるとところにあつたためです。しかし、日本語アクセントの入門書としては、無アクセントの解説も必要です。次の機会にはぜひ、取り上げたいと思います。

木部 暢子 (きべ・のぶこ)

国立国語研究所副所長、時空間変異研究系長。博士（文学）（九州大学）。鹿児島大学名誉教授。2010年4月より現職。主な著書・論文：『鹿児島県のことば』（共著、明治書院、1997）、『西南部九州二型アクセントの研究』（勉誠出版、2000）、『方言の形成』（共著、岩波書店、2008）。

受賞：新村出財団研究助成（新村出財団、1990）。

社会活動：日本語学会理事、日本音声学会評議員、日本方言研究会世話人、日本学会会議連携会員。